

厚木市郷土資料館 第1回収蔵資料展

厚木の画家 島村 亮



厚木市郷土資料館

ごあいさつ

厚木市では、市民の教養、学術及び文化の発展に寄与することを目的とし、厚木市郷土資料館を平成10年11月3日に開館いたしました。

この資料館で行われます事業の一つには、教育委員会が収集してきた資料の整理、保存、そして調査、研究があります。今回、開催されます第1回収蔵資料展「厚木の画家 島村亮」展は、ここで整理された館蔵資料を広く市民の方に観ていただくという試みです。

これらの館蔵資料は、市民の財産であるとともに、すべての人の財産でもあります。したがって、今後は館主催の展示会に出品されるだけでなく、研究者への閲覧、他の博物館施設への貸出なども行われ、館蔵資料はさらに有効活用されることとなります。

さて、今回の展示会における主役・島村 亮画伯は、厚木市の出身で、帝国美術院展、文部省美術展等の官展を中心に、数々の展覧会に入選、晩年には文部省主催日本美術展覧会委員もつとめられた方です。

島村家からの寄贈、購入によって収集した作品には、市の財産として市民のみなさま方に永く鑑賞していただけるよう、額装、裏打ちなどの保修、保存処理を施してきました。今回、御観いただく画伯の作品、関連資料は総点数140点で、ここには少年時代の習作から、代表作「春甫」、大正8年から昭和31年までのスケッチ等、興味深い作品が含まれています。

本年は島村画伯の没後40年にあたりますが、奇しくも院展100年という節目の年でもあり、各地で盛んに展示会が催されました。島村亮は、在野の美術団体である院展に対し、帝展などの「官展」を中心に活躍しました。本図録では、島村画伯が当時の画壇をどのように考え、活動したのか、そしてまた画伯が師事した安田靉彦先生との関係についても概観できる解説となるようにつとめました。さらに、島村画伯の作品理解の助けとするため、高瀬慎吾、寺田進の両氏による島村画伯の経歴、ひととなりの紹介、及び画伯自身による「日本画は生きている」「続札金行」を再録させていただきました。

今回の展示会開催にあたりましては、画伯夫人の島村百合子氏をはじめとしまして、島村とよ子氏、寺田スズ子氏、その他関係各位には大変お世話になりました。また、塚越正明氏には資料提供をはじめ、多大なるご協力をいただきました。記してお礼申し上げます。

郷土資料館は、市民生活に密着し、市民ニーズをふまえ、かつ開かれた資料館となれるよう努力を続けてまいります。今後とも、より一層の御指導、御協力をお願いいたします。

平成10年12月

厚木市教育委員会

教育長 高橋 正

目次

ごあいさつ

口 絵

目次、凡例

厚木の画家 島村 亮

- | | |
|----------------|--------|
| ・厚木が生んだ画家 島村 亮 | 高瀬 慎吾 |
| ・島村さんというひと | 寺田 進 |
| ・続札金行 | 島村 亮 |
| ・夫 島村亮の晩年 | 島村 百合子 |

島村 亮とその時代

- | | |
|--------------|-------|
| ・日本画は生きている | 島村 亮 |
| ・靱彦の門下 島村亮 | 塚越 正明 |
| ・23冊のスケッチ帖から | 大野 一郎 |

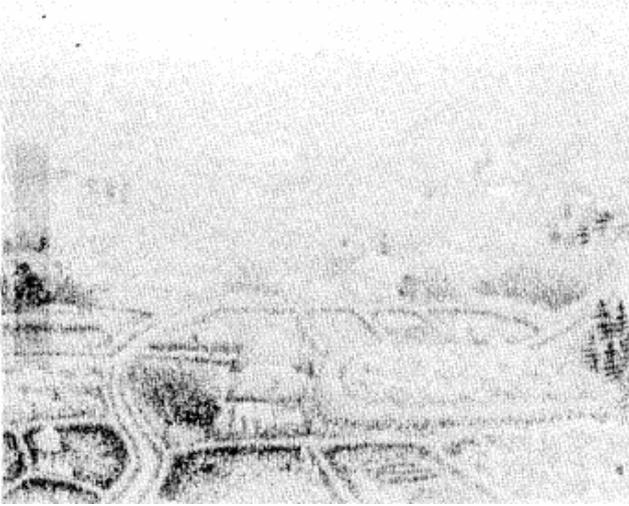
収蔵作品、資料一覧

凡 例

-
- ・本展は収蔵資料のうち、島村亮画伯の作品及び関連資料を展示した。
 - ・会期中、一部展示替えを行うので図録記載の作品であっても展示されていない場合がある。
 - ・本展企画、図録編集は大野一郎（厚木市郷土資料館）があたり、執筆者はそれぞれ記した。資料一覧は、渋谷利雄氏が作成したものを利用させていただいた。

展示会 information

-
- ・会 場 厚木市郷土資料館 特別展示室
 - ・期 間 平成10年12月23日(水)～11年3月21日(日)
 - ・時 間 午前9:00～午後5:00
 - ・協 力 島村百合子、島村とよ子、寺田スズ子、塚越正明（敬称略、順不同）
-



春 甫 (昭和10年)



秋 林 (昭和11年)



中津溪谷 (関東私鉄沿線南画展)

厚木の画家 島村 亮

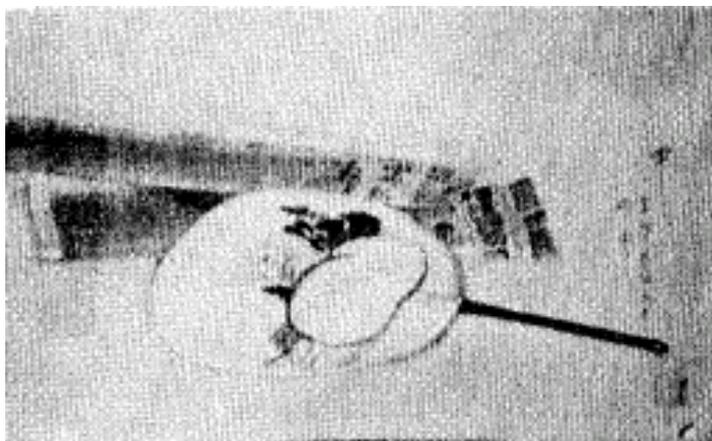
島村 亮は、厚木出身の日本画家。帝国美術院展、文部省美術展等、数々の展覧会に入選、晩年には文部省主催日本美術展覧会委員もつとめている。

厚木が生んだ画家・島村 亮を、島村家からの寄贈、購入等により収集した作品、関連資料 140 点によって紹介する。ここには、少年時代の習作から、代表作「春甫」、「厚木上橋」など厚木の街を描いたものなど興味深い作品が含まれている。

a. 少年時代

少年時代から絵が上手だったという亮の尋常高等学校時代の習作をみる。

地図	朝顔
騎馬武者	ひまわり
蝶二匹	傘



うちわと新聞

b. 代表作

帝国美術院展、文部省美術展の入選作である「春甫」をはじめとして、大作4点を展示。

「春甫」はその代表作で、昭和6年の日本絵画展入選作。この画には、スーラ等フランス印象派の画家達が用いた点描画の手法が用いられている。日本画の亮と点描の組み合わせについては、評論家の森口多里が、当時の画壇状況から次のように述べている。「筆技の自信とそれからくる一種のイメージーゴイング（安易さ）とが自然との接触を疎淡ならしめ」、著名作家にもこの種の作品が多いと批

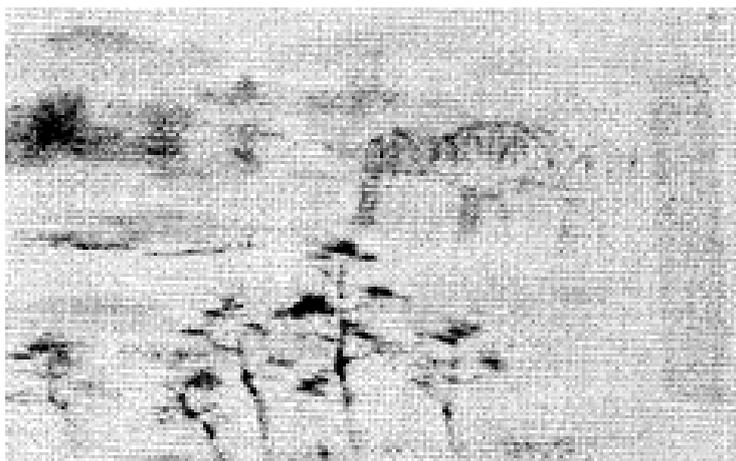
判し、その中であって、この作品には「伝統的技法への真率な反省と自然への正直な親和」がみられると高く評価した。

春 甫 (153×188、帝国美術院展入選)
秋 林 (148×176、文部省美術展入選)
早 春 (153×188) 春 野 (175×210)

c. 厚木を描く

亮が厚木の街に遺した愛すべき小品、亮の描いた「厚木」をみる。

厚木上橋 相模川畔
長谷人形頭 松王 長谷人形頭
厚木六勝模写 (雨降晴雪、仮屋喚渡、相河清流、桐堤賞月、熊林暁鴉、菅廟驟雨)



厚木上橋

d. 参考資料

短文をよくした亮の紀行文が掲載された雑誌などから、亮のひととなりを偲ぶ。

『睦月』昭和15年8月号
『北相文化』創刊号

厚木が生んだ画家 島村 亮

高瀬 慎吾

島村亮の本籍は妻田村（厚木市妻田）であるが、彼は少年時代から厚木町に住んだ。厚木小学校を卒えてから、自ら希望して日本画家山内多門の門に入り、画家となる決意をした。多門は橋本雅邦、川合玉堂に師事したので、その画風は両者からの影響が強く、自然の奇異を描写するに妙を得ていた。そのため亮の20歳頃のスケッチ帖に、朝鮮の各地山岳を念入りに描写したものがある。この一帖に接すると、彼が後に南画にこころざしたことが理解される。しかし、昭和の初期、多門が主宰した若葉会展へ出品した亮の諸作品をみると、亮が自作の上に独自の天地を開拓しようと努めたあとがうかがえる。第9回展の「猫」、第10回展の「寒雀」などはそのひとつとなりと努力のあとをおもわせるまことにこの美しい作である。

昭和7年5月、多門の没後、亮はかねてその作風にあこがれをもっていた安田鞞彦の門に入った。もっとも、その頃彼は春陽会の洋画研究所へ通って木村莊八や石井鶴三の指導を受けつつ洋画の研究に意をそそいだ。この前後のことをいま考えてみると、彼が芸術上の深い悩みに苦しんでいたことがわかる。昭和6年からは日本画会展に連続入選。昭和10年第1回帝国美術院展に「春甫」が入選。翌年は文部省美術展に「秋林」が入選。昭和12年第1回の文展に「春閑」が入選、以来たびたび入選をつづけ、昭和22年には文部省主催日本美術展覧会に推された。またそのころから県立厚木東高校をはじめ各高等学校で画図科の指導をつづけ、かたわら独自の新作をつぎつぎ発表した。が、昭和33年3月20日、厚木の自宅で病没した。58歳であった。

亮の作品は多種多様にわたるが、一貫したものは淡泊の感じのものが多いようだ。これは彼の好みでもあったがその性格に因由したものでもあった。彼が残したスケッチブックをみると、眠り呆けた狗、ころりと死んでいる小鳥や雑魚のるいなどが Humanity に描写されていてほほえましい。亮はまた短文をよくした。『睦月』という雑誌に載っている甲州路の写生画入り紀行などは掬すべき味わいをもっている。それらによると“亮さん、亮さん”とみんなから親しまれ慕われていた彼の生活態度が偲ばれる。

亮の作品は多く残っている。その点描画は、彼独特のものではないが、あれだけの画境は尋常画家の及び得るところではない。彼の評価が改めてなされることを予は信じて疑わないのである。

昭和45年春

（『厚木近代史話』より転載）

島村さんというひと

寺田 進

島村さんと私の交際は戦後の昭和21年晩秋のころであった。私は島村さんの弟の孝さんと仲好しで、ひとつ年上の孝さんとは毎日のように遊んだものである。島村さんは私より8歳も年上だったので少年時代には親近感はほとんどなく、また大正初期から山内多門の塾に、そして多門没後は安田鞞彦の門人として入塾し、ほとんど自宅にいることは稀だったからである。

戦後、急に島村さんと親交が結ばれたのはつぎのような事情からであった。すなわち当時社会は戦後の混乱状態であり、学校で教員の不足も目立ち、特に芸能関係の欠員は著しかった。そのとき私は島村さんのことを思い出し、面接して意図を打診したところが、承諾を得たので、早速採用と決まり、それ以来親交が始まったのである。

島村さんの画歴については高瀬慎吾氏の「厚木が生んだ画家 - 島村 亮」に詳述されているので重複をさけ、別の一面を記しておこう。島村さんは一芸に秀で、しかも多才の人であった。多才というと「器用・上手」と思われがちであるが、島村さんの場合は単に器用上手に止まらず、その才は衆人の上に出ていたように思われる。たとえば百人一首についていえば、その作者の名、歌の意義はもちろんで、下の句を詠めばすぐに上の句を知る。また札の取り方の早さも人並みではなかった。相手が3人4人がかりでもかなわなかった。「下手」は何人よっても1人の「上手」にはかなわぬことを私は知った。百人一首はわずかに百人の作者、百首の和歌にすぎないが、札取りという実技まで含めてその内容の豊富なことは古来の研究、著書によっても知られる。

将棋については知らないが、囲碁は厚木東高校の職員の遠く及ばぬところであった。

また茶道、華道についても、その晩年ふとしたことから興味をもち、たちまちにしてその道の同僚や先輩と互角に競うほどの技量を身につけた。しかしそれが晩年であったため、上達の域に達しなかったことは残念であった。

島村さんの本来の画業については前述のごとく高瀬氏の業績のとおりであるが、その性格の故か、その実力が世に評価されるには時を要した。ごく晩年に至ってようやく人の認めるところとなって、たとえば伊豆の大温泉旅館の襖絵を描いた。ふた月、み月と滞在して執筆すること数回に及んだ。一段落して帰宅するとすぐに私の家へ来た。来ても自らの仕事の様子を語るでもなく、こちらから聞け

ばその一端を語る程度であった。完成に至らずして他界したのではないだろうか。私は今日までその作品をみる機会のなかったことを残念に思っている。

昭和33年3月20日、早朝島村さんの急逝の知らせを受けた。その前々日、すなわち18日の昼頃、東町通で診療帰りの島村さんにあった。そのときは「風邪をひいていたが快方に向かったので近日遊びに行く」とちょっとどもりながらいうのを私は聞きつつ別れた。島村さんの急変はその翌日の夜半のことであった。私はそのときぐらい人生のはかなさを感じたことはなかった。

島村さんの内気で遠慮深い性格は画業においても、その実力以下に評価されていたのではないだろうか。私は島村さんの力作ともいべき軸もの1本と色紙数10枚を所持している。子供にも孫にも私はこれらが厚木の生んだ画家島村亮の作品であることを話して聞かせてある。

続 札 金 行

島村 亮

五月二十五日土曜日久しぶりに朝から雨が小止みなく降り続いてゐる。昨夜耳動子さんと約束して、あまり雨が激しい様であったら止める事になってゐたので、今日の札金行きは無論中止のことゝ思っていた。今年は雨が非常に少ないので誰もが雨を待ち望むでゐるを、誠に申し訳ないことだが今日ばかりは少し恨めしくなる。

俳人や畫家は反って雨でも降った方が趣があるから、大ていの雨なら出掛け様と話あってゐたので、出掛ける様になるかも知れないと思ったりしてゐた。

午後一時近く耳動子さんの来訪があつたと云ふので、二時半の汽車に間に合う様大急ぎで新宿駅にかけつけた。

今日は松雨さんのご案内である。昨年暮頃から松雨さんが一度ご案内致しませうとお話があつて久しく楽しみにしてゐたのが今日実現したのである。

汽車が八王子を過ぎる頃から天候は次第に良くなって、時々は日の光りさへさす様になった。雨後の甲州路はあかるく輝いて五月の緑はしつとり美しい。周囲の山々には霧がかゝったりで、晴れたりして、山又山の甲斐の国が一層山深く感じられた。先日耳動子さんと一緒に売立展観で菱田春草の夏山の圖を見たが、その山が丁度今日眺める山と同じ様な感じなので、耳動子さんが春草の山そつくりだと言れる。そして亮さんに今度こう云う風の繪を描いて貰ひたいなあとのことであつた。

松雨さんの御注意で間もなく日本三奇橋の一つ、猿橋を車窓に眺める。つひ先頃猿橋の町に火災があつて猿橋も危険だと云ふ記事を見たが、猿橋だけは事なきを保つてゐた。猿橋駅の次の大月で富士登山電車に乗換へ、田ノ倉駅下車。これ



より徒歩、近道の畦道や鉄道線路の縁を通る。この部落は柿木が豊富で、若葉がおほひかぶさる程である。綺麗な小川が音を立てて流れてゐる。処々に水車があって、水車の水音と柿の若葉とがよく調和してとてもすがすがしい。この水車は飲料水を作るため、山川からかたはらの水槽の中で濾過されてゐるのである。

村を出外れると道は左折して山路になる。ゆるい傾斜なので少しも苦にならない。鶯が盛んに啼いてゐる、可成山に入った頃、ふと時鳥の聲を聴いたと思った。一行は誰も聴かれなかったと見えて取りあってくれない。

道が少し急になったと思つて上の方を見ると一軒の家が見えた。札金鉱泉の宿だ。温泉宿らしくない山の一軒家である。庭に一匹の犬が繋がれてゐた。見知らぬ人に驚いてか、たちまち恐ろしく吠えた。六十位の老夫婦が一行を迎へてくれた。双魚さんは犬が好きと見えて犬の傍に行つて動かない。宿のおばさんが、此の犬はなかなか猛犬だから側へ寄らない様にと注意してくれた。足がブルドックの様に四つばいになってなかなか強そうである。名も四つとついてゐた。双魚さんが寄つて行く。犬も犬好きの人はわかると見えて忽ち仲良しとなつてしまつた。宿の前に靴もぬがずに周りの新緑を眺めてみると一聲はっきりと時鳥が啼いた、やっぱりさっきのはほんものであつたと少し良い気持ちである。

宿にお馴染みの松雨さんが先に立って我々を案内される。家は粗末だが素朴で何の気兼ねもなく打ち寛げて誠に好ましい。お茶が出る。お茶菓子が出る。山には不似合ひな最中が出る。松雨さんは僕が一人で来る時は、こういふ上等のものは出ないが、今日皆さんのために特別に町から仕入れて来たものらしいと、すっかり上客扱ひにされてしまふ。一風呂浴びて食事になる。おばあさんは御馳走を運んでくれたが、お給仕はしないらしい。そこでお給仕は食事毎に交代でする事になった。最初は僕が当



たる。御馳走は昆布巻に精進あげとお葉の茹でたもの、山の温泉らしくて嬉しい。食後は漫談句作、僕は道で捕へて来た蟹や花の写生をする。双魚さんはなかなか勉強でいゝ句が沢山出来る様だ。時々耳動子さんに斯う云ふのはどうでせうか等と話しかけられる。漫談は夜が更けるまで続く。寝る前に又湯に入った。こゝは未だランプであり、浴場を鈍い光で照らすので湯気に霞んだ浴場はやはらかに描き出されて、山の湯の宿を一入深く感じさせる。十二時頃寝に着く。



夜明頃宿の上を時鳥が啼いて通った。何だか半分夢の様に思っていると宿のおばさんが「もう六時だといふにご飯が冷めてしまいますよ」といつて起こしに来た。松雨さんは一番早く起きたやうだ。

九時頃散歩に出掛ける。松雨さんだけは洋服で、耳動子、双魚さんは褌袍に靴と云ふ珍しい出で立ちだ。山は大部分霧が晴れてみた。道の傍に狸が死んでゐる。よく見れば未だ子狸の様だ。どうして死んだのか色々想像されて可愛そうになる。誰かが、これは惜しいことをした。今少し早かったら毛皮を襟巻きにして奥様のお土産にしたものをと一同大笑ひ。峠の附近には、あやめが咲いてゐた。双魚さんは蕨をお土産にするのだと盛んに摘まれた。耳動子さんはいちはちの様な植物を見付けられて、これはいちはちぢやないかねと問はれるので僕はこんな処に生えないでせうと云ふと、否や！いちはちか生えて見たのだらうと洒落られて、また大笑ひ。峠から右に行くと九鬼山道である。皆手帳を片手にして句作り乍らゆるゆると登って行く。先刻山裾の方で人聲がしたと思つてみたら、だんだん追い付いて来た。今朝東京を発つて来たハイキングの一行で、あやめや蕨を取り乍ら愉快そうに登つて行つた。松雨さんのお話では九鬼山から猿橋に下る途中に樞の碁盤を造つてゐる一軒家があつて其処に行くと樞の木屑を焚いて呉れるので其の香が何とも云へないと云ふ。耳動子さんは其の碁盤を一つ買って帰りたいものだと言ふ。

見晴らしの良い処に出ると何鳥か数丁先の松林の間から飛び立って九鬼山の中腹を斜めに飛び去つた。そして三聲ばかり激しく啼いた。時鳥である。皆なは大喜び。こんなに、はつきり飛びながら啼く時鳥を見たのは始めてである。引返して一時頃宿に帰り、四時頃帰路に着いた。すっかり天候に恵まれた愉快的な吟行であつた。

(『睦月』昭和15年8月号より転載)

夫 島村 亮のこと

島村 百合子

(島村亮夫人)

主人と一緒に5年ほどで亡くなってしまいましたので、あまりお話するようなこともないのですが、晩年の夫について思い出すままに筆をとらせていただきます。

主人は、昭和27年から33年、亡くなるまで伊勢原高校の美術教師をしていました。なんでも「すごくいごちがいいんだ」といっていました。ここでは、修学旅行や遠足にもついていき、写生などもよくしていました。一度など台風に遭遇し、「もう一便はやい船だったら沈んでいた」ということもありました。この他にも、近所に前市長の足立原さんが住んでいらっしゃいました関係で、厚木高校の美術も教えておりました。教師といえば、戦前に横浜捜真女学校に勤務したのは、著名な日本画家の小倉遊亀さんの代わりだったといえます。ともに安田鞞彦先生に師事していた関係だったからでしょうか。もっとも、遠くて通勤が大変だったためか、わずか一年間で辞退しています。安田先生のところへは、毎年正月にご挨拶に出かけていたようです。その時にお弟子さんたちが大勢集まるということでした。

若い頃の話などは、あまりしない人だったので最初に師事した山内多門先生のところで勉強していた頃のことはよくわからないのですが、一人で下宿をしていたのでしょう。食べ物にはうるさいことをいわなかったのは長く一人暮らしをしていたためかもしれません。また、スケッチをたくさん残している朝鮮旅行は、多門先生のお伴だったということをお話してくれました。終戦直前に召集され、ほんの少しですが、軍隊にもいったんだということもいっておりました。その時に使った、毛布を大事にとっていました。マッチの箱などもスケッチなどに使うのでしょうか大切にしまっていました。

*

晩年は山の絵をよく描いておりました。山は好きでよくでかけていましたが、登山というほどのものではなく山歩きで、厚木小学校校長を退職された中島先生が絵を教わりにきていて、この方と昇仙峡などにでかけていました。また、茨城県の潮来十二橋あたりでも写生をしていたようです。

遠くの山にでかけない時でも、近所の小高い山、林などを好んで描いていました。私は絵のことはよく分かりませんが、主人が描いたものの中では山の絵がすきです。

厚木という土地柄で、よく鮎の絵を頼まれていましたが、主人はよく相模川へでかけ、河原の石を

いろいろな角度からスケッチしていました。「泳ぐ魚だけではなく、石もきちんと描く」といっていました。どこへ行くにも、画用紙と鉛筆は身体からはなしませんでした。何かスケッチしたいものを見つけるとすぐに描きだせるようにです。

*

主人の仕事場は、回り廊下の八畳間でした。仕事場にこもって何日も出てこないというタイプの人ではありませんでしたが、作品を仕上げているときは、夜中でも描き続け、なかなか出てきませんでした。仕事場には作品、絵の具などがあったため、子供たちには「入ってはいけない」といっておりましたので、子供ながらにもいけないと思ったのでしょうか、決してはいることはしませんでした。子供たちは、三歳半で父親を亡くしていますのでほとんど記憶はないと思います。子供の世話などはしない人でしたが、虫が鳴いていると庭へ降りていき、ぱっと虫をつかんできてくれるような人でもありました。

厚木では戸田のお大尽だった小塩さん、座間の寺田さんとは特に親しくしていただき、寺田さんのところにはしょっちゅうお茶を飲みに来ていました。亡くなった昭和33年には、悪性感冒が大流行した年でした。知人が危篤になったため、見舞いに行ったり、葬式にでたりして風邪を悪化させ、あっけなく逝ってしまいました。普段は、風邪などひかない人で私が風邪をひくと「だらしないからだ」というような人だったのですが、このときは本当に急なことでした。

*

縁あって一緒になってから5年間、私が仕事をもっていたこと、すぐに双子の子供ができたことなどもあって、ほんとうに目まぐるしく過ぎてしまいました。



晩年のポートレート（昭和30年頃）



仲間と一緒に（後列中央）

島村 亮とその時代

島村 亮が生きた時代は、日本画の在野団体日本美術院が再興され、大家が活躍した時代でもある。亮が師事した山内多門、安田鞞彦といった大家もその会員であった。'98年は、院展100年ということで、「近代日本美術の軌跡」展が上野の東京国立博物館で開かれたのをはじめとして、各地で関連の展示会が催された。しかし、亮はこの院展ではなく帝展、文展などの官展を中心に活躍する。大正8年から昭和31年までのスケッチ帖に亮の足跡を追う。また、亮が師事した山内多門、安田鞞彦といった大家の作品を亮の模写でみる。

a. 23冊のスケッチ

亮が遺した年代別のスケッチ。これらの作品、資料から亮の足跡を追う。

画帳（大正8年～昭和31年まで）

b. 師事した画家

亮が師事した大家、そして近代日本画の父といわれる橋本画報の作品を、亮の模写にみる。

【山内多門】（1878～1931）

書家。都洲と号す。明治11年4月29日、宮崎県都城に生まれる。はじめ画法を中原南溪に学ぶ。明治32年上京し橋本雅邦の門に入り、のち河合玉堂に師事して業おおいに進み、ついに帝展審査員となる。最も山水画に長じ、好んで自然の奇景を写し、筆気剛勢、構図非凡。また、若葉会を主宰して後進の指導に尽くした。

山家と洗濯女
急流と人と牛
（参考）中国風景画（3点） 山内多門作

雨と釣人
牛のいる風景

【安田鞞彦】（1884～1978）

日本画家。本名新三郎。明治17年、東京に生まれる。小堀鞞音に師事し、今村紫紅らと紅児会を起して新日本画の開拓に尽くした。日本美術院が再興されるとその同人となった。寡作であるが「守屋大連」や「夢殿」は初期の代表作。「黄瀬川の陣」は日本画の長所を發揮した記念作である。高雅な洗練された画風に特色があり古代美術に対する造詣を反映した「日食」や「王昭君」等にも独自の画風を示している。帝室技芸院、芸術院会員で、文化勲章受章者。東京芸術大教授を昭和26年まで勤めた。

【橋本雅邦】（1835～1908）

天保6年、江戸に生まれる。狩野勝川雅信の門に入り、26歳で独立し一家をなした。明治21年に岡倉天心が設置した文部省絵画取調所に同門の狩野芳涯とともに所員となった。のち、東京美術学校の教授を経て、明治31年岡倉天心とともに日本美術院を起す。

狂女の図 呂洞寶雲坊之図	雪景山水
-----------------	------

c. 中央画壇の動向

日本美術院設立、そして文部省美術展覧会開設以降、守旧派對革新派、という二項対立図式で描かれてきたのが、当時の日本画壇。それに、亮の動向を重ねてみる。

『第1回文部省美術展目録』 「趣意書」（島村亮画伯作品頒布会）

日本画は生きている

島村 亮

“日本画は生きている”のかという前に、日本画とはどんなものであるかということを知ってもらいたいと思います。一般に日本画の歴史、伝統、特質等あまり知られていないし、無関心の人が多いと思います。そういうことが認識されると、自然と日本画が、現在の我々の生活に生々ととけこんでいることがわかると思います。

日本人は日本画というものになじみすぎているせいか、日本画というと、こんなものかと只表面のこととしか知らないし考えないのであります。それに日本画とか、洋画とかいっても、その区別すらわかっている人が少ないのであります。

一体日本画とはどんなものであろうか。日本画がどのようにして生まれたか、どのように発達したかということから知ってもらわないと、日本画の特質、価値等がわかってきかないのではないかと思います。このようなことが少しでも知ってもらえれば、日本画が現在のわれわれの生活に、どのように生きているのかということも、自然にわかって来るのではないかと思います。

日本画といっても、その技法、材料すべて支那、今の中国から伝わったものなどであります。千数百年前、仏教文化と共に我が国に伝わったもので、むしろ日本画というよりも東洋画といった方が適切なのであります。始めは絵画として独立に鑑賞されたものは殆どないらしく、その多くは仏画として発達したもので、釈迦、菩薩等の像を描いてそれを信仰の対象としたものであります。それが時代を経るにしたがって、独立した絵画として発展していったのであります。当初は支那から仏教と共に多くの仏師（仏像を彫刻する人）や、画家が来朝したようでありますが、日本人の中からも、次第に優れた画家が生まれてきたのであります。そして時代を経るに従って日本人の生活にとけこんで育まれていったのであります。始めの模倣時代から次第に日本独特の芸術が生まれてきたのであります。これは絵画ばかり独特のものとして発展したのではなく、総てのものが日本固有の発達をしたのであります。日本画に密接な関係をもつものに建築があります。建築には、神社建築、仏教建築、そして住居の建築があります。神社や寺院の建築を書きますと長くなりますから、ここでは住居のことを簡単に述べて見たいと思います。住居といっても現在吾々が住まっている家のことであります。

これもあまりなれすぎて別に大した関心も持たず、日本独特のものと考えて見る人も少ないのであります。先ず柱であります、自然の木材をわずかに加工して木の目もあざやかな柱を使用します。新築の家の、木の香も新しい家の感触は誰でもすがすがしく気分のよいものでありましょう。それに畳、戸障子、襖などなんと清楚な感じではありませんか。殊に戸障子等の建具の繊細な美しさ、その細工にいたっては美術的な細かい神経が使われています。このように簡素で清楚な感じを取り入れた住居が、世界のどこの国にありましょう。それに日本の住居には必ず床の間があります。これは戦災後のバラック建築は別ですが、普通の住居でしたら大抵は床の間を作ります。この床の間は個人の美術品鑑賞の陳列場所です。

外国の住居はよく知りませんが、個人の住居に美術品を鑑賞する処を造りつけてある住居は世界の何処の国にもないように思います。この床には日本画をかけて鑑賞するのが常識です。このように日本画は古来から我々の生活にはなくてはならない必需品のようなものでした。大部分の日本人は、その生活にあまりなれすぎているせいか建築のもつ独特のよさ、美しさ等を考えないのであります。そこに必然的に簡素で清楚の美を誇る日本画が育まれていたことを知らないのであります。

徳川幕府が倒れ明治の世になって、諸外国との交渉が盛んになり所謂西洋画が入ってきたのであります。洋画の技法を学ぶ人も沢山でくるようになり、その技法を正しく学ぶために洋画の本場といわれるフランスへ留学する人も出て来たのであります。洋画は時代の波にのって非常な勢いで発展して参りました。文部省等も学校に図画科を置き図画教育を始めました。この教育方法は殆んど洋画の技法を指導したのであります。

然し洋画がこのように発展したのであります、日本画も明治以向異常の発展をしたのであります。洋画が如何に発展しても日本には東洋古来の技法がありましたので日本画は依然として、日本人の間に尊重されたのであります。それどころか、明治の世になって西洋画が入ってきたのが返って大きな刺激となり、封建時代に眠っていたような日本画が、一時に春が来たような百花瞭欄乱と咲き誇ったのであります。日本画の古来の伝統を生かし、西洋画の新しい技法を取り入れ、茲に新しい日本画が生まれ現代のような日本画に発展してきたのであります。

最近の日本画は、日本画だか、油絵（洋画）だかわからないという人があります。その通りであります。今や美術界も国際的になって技法の上にとや角いう必要はないと思うのであります。ただ、材料の上で日本画と区別がつくのでありまして、描法はどう表現しようと自由であります。それが抽象的であろうと具象的であろうと、かまわないのであります。

芸術家は、個人々々の考え、個性によって美を追究してゆくのであります。ただ単に伝統を追求するといって、日本画はこう描かなくてはならない。南画はこういう風に描くのだ、とはないのであります。そんなところに真の芸術は生まれないと思います。伝統々々といって型ばかりを守っているものは、ただその画風の亜流に過ぎなく何の感激もないのであります。ところで伝統を否定しろといわ

れますが、それはほんとうの過去を見つめるということで形式的な型ばかりを否定することだと思えます。昔の偉い画家は皆それを行っているのであります。雪舟や宗達にしてもそうだと思います。雪舟以前に雪舟なく、宗達以前に宗達がなかったように。各々自分の信ずる所を追求していったのであります。これらの人は真に伝統を否定し、真の伝統を生かした大画人といえましょう。

前にも述べましたように、今や日本画というものは、ただ材料のたがう点で日本画ということになると思えます。然し、描法は自由でありまして、日本人の描く絵はやはり日本画であります。如何に描法を洋画風にしても国民性というか、日本古来の国民の感覚か、日本画でなくては出せない特種な感じが出るのであります。

他国にはこんな状態で日本画は何処へゆくのかを案ずる人がありますが、明治時代に若い人達によって洋画の技法を取り入れた表現をしたのに対し、当時は朦朧派と呼ばれ前途をあやぶまれた絵が今や古典的になろうとしているのであります。

現代の日本画も苦難の道を歩み今後も幾変転することでしょう。しかし伝統ある日本画は、日本人独特のすぐれた芸術的感覚によって日本国が亡びない限り全世界の特異な存在として永久に生かされてゆくのではないのでしょうか。現代日本にも沢山の立派な画人が各々の画業に精進しておられます。現在の日本画も立派に日本人の生活の中に生きています。

(『趣味の鶴巻』より転載)

鞆彦の門下 島村亮

塚越 正明

院展とは

明治の偉大な文化指導者岡倉天心は、横浜に生まれ、幼い頃から英語を学び、東京大学を卒業してから文部省に勤めました。今日の東京芸術大学の前身は、東京美術学校とって、明治22年開校しました。岡倉天心は、2代目の校長なのですが、初代がすぐにやめたために、天心が初代の校長と考えている人が多いようです。発足当時の美術学校は、絵画は日本画だけで洋画はなく、彫刻も木彫だけ、という日本的な講座が中心でした。天心は名校長として、数々の業績をあげましたが、なかでも下村観山、菱田春草、横山大観などの俊英を育てたことは有名です。また、今日の文化財行政の9割以上が、岡倉天心によって発案されておりました。

その天心が明治31年文部省から突然罷免され、「天心先生が辞めるのであれば、私たちも辞める」と、ほとんどの学校関係者が言い出し、驚いた文部省は「お上に向かって矢を射るのか」とおどしたりすかしたり、数々の工作をした結果、それでは学校に残るといふ人々もでましたが、最後まで天心先生と絶対行動をとるといふ頑固な人もおり、近代日本画の父といわれる橋本雅邦もその一人でした。天心は、「美術の大学の上に美術の大学院をつくろう」と、美術学校に隣接する上野、谷中の地に日本美術院を創設しました。そこは絵画だけではなく、彫刻も工芸部門もありました。この日本美術院の開く展覧会を略して「院展」とよんだのです。これはまったく在野の機関で、当初は意気軒昂に活躍していましたが、その後財政難になり、また、天心がボストン美術館の東洋部長として渡米したりしましたので、美術院の活動も次第に衰え、明治36年展で消滅状態になってしまいました。

それを、天心没後の大正3年、横山大観、菱田春草、安田鞆彦、今村紫紅らが経営者（同人）となって再興し、平成10年には100年の歴史を数えました。院展は、当初彫刻部門、洋画部門もありましたが、やがて日本画だけとなり、今日もっとも長い歴史を誇る展覧会となっています。

団体の性格として

中国には、「書は六朝」、「詩は唐詩」、「絵画は宋元」という言葉があり、特にその時代にそれらの文化が栄えたとされています。院展の創設者天心は、特にアジアの芸術の特性を強く発揮したと

思われる宋代の絵画芸術をとりあげ、これを中心として東洋美術の流れを復興させようとした。新しい日本画はこの宋元の特徴を軸として、そこに近代西洋の芸術とも親和できる新世界を開かなくてはならない、と考えたのです。具体的には西洋の厳しい写生画を導入したりして、江戸時代以来の低次元から脱皮し、世界に通用する日本画の創造を目指しました。

特に再興美術院において、安田靉彦や小林古径らによって始められた新古典主義は、亡くなった天心の理想としたところでありましょう。それは、形は正しく、精神内容は深く、格調高い、気品のある作風でした。

官展と当時の美術関連団体について

近代における美術作家は個性が尊ばれます。個性とは公認された個人の癖です。それゆえ美術作家はそれぞれの個性を売り物にしています。美術作家は考えを同じくする人たちがよく団体を作りますが、大体2～3年、意気軒昂で解散してしまうのが常です。それは個々では考え方がそれぞれ異なっているからです。ですから作家の数ほど団体の数があっても不思議ではありません。

明治以降、それまでの中国、朝鮮の影響下から離れ、優れた文物はすべて西欧から入ってくると日本人は考えるようになりました。日本政府の要人の中には、フランス政府の行っている美術展(サロン)を日本でも開き、大いに日本の美術文化を高めたいと考えました。そして文部省によって明治40年に官展(文部省美術展)、略して文展が始まったのです。文部省は文展を始めるにあたり、日本一の美術展にしなければならぬと、その頃東京や京都に大小さまざまあった美術団体の代表を呼んで、文展の開催に協力するようにと申し渡しました。当時、若手の日本画家の団体「紅児会」の代表安田靉彦も、呼ばれた一人です。

この時、文部省は岡倉天心にも声をかけ、天心は文展の役員となります。それだけでなく、天心は弟子から下村観山、横山大観の2人を審査員に加えました。これは、時の文部大臣と天心の関係が良好であったのに加え、当時の院展の活動が低調であったためと考えられます。

靉彦と門下生

安田靉彦の門下生ができたのは昭和4年、大磯に住まいを建ててからであり、その一番古い弟子は藤井白映でしょう。その後、昭和8年に14人からなる研究会「火曜会」が発足しました。「火曜会」という名は、毎月第一火曜日に行われたことからつけられた名称です。盛んな頃は、40人ほどの会員がおりましたが、靉彦の晩年、師の健康を慮って休会になったようです。昭和62年、神奈川県立近代美術館で開催された、「安田靉彦とその一門展」では、小倉遊亀、岩橋英遠、羽石光志、真野満、郷倉和子、吉田善彦、森田曠平、鎌倉秀雄、伊藤髟耳らがあげられていますが、それらは門下生のうち院展の経営者(同人)になった人たちです。靉彦の教育方針は、「僕は教育者ではないから人格的なことであれこれ言って直すようなことはできないけれど、ただ、良い絵を描こうとしているとか、

あるいは良い面をもっているというような場合は、それをとりあげて出来るだけその長所をのぼすようにしてあげたい」と常々言っていました。また、門下の小倉遊亀が、ある時「私、才能があるのでしょうか」と鞆彦にたずねた時、鞆彦は「あなたはいつ自分に才能があるとかないとか言えるほどの絵を描きましたか。私たち絵描きはただ一生懸命描けばよいのです。あとのことはあとの人がやってくれます」と、言ったといわれます。大体、自分の作風を押しつけることなく、門下生に自由に活動させていたようですが、古い門下生は「先生は実に怖かった」といっています。そして鞆彦の大磯の住まいの手前にある小さな橋を、門下生は「なみだ橋」と呼んでいたようです。それは、これから先生に会うのが怖く、また多分怒られて帰ることが多かったからでしょう。

院展、官展と島村亮のスタンス

島村亮の師匠は、山内多門といわれ、川合玉堂の弟子でした。玉堂は愛知県に生まれ、はじめ京都で各派の勉強をし、その後東京に移って狩野派を学び、主に日本の田園風景を主題とし、やがて国民的画家といわれるほど大成した人です。前期院展では中心的に活躍しましたが、再興院展には参加しませんでした。その後、美術学校の教授を長年勤め、温厚な人柄で天心亡きあとの日本画部門を盛り立てました。玉堂自身は官展作家として活躍しましたが、そういうことから官展と対立する在野の団体、院展にも好意を持っていたと考えられます。もちろん師匠がそうであれば官展作家であった山内多門にもそういう気持ちがあったことでしょう。

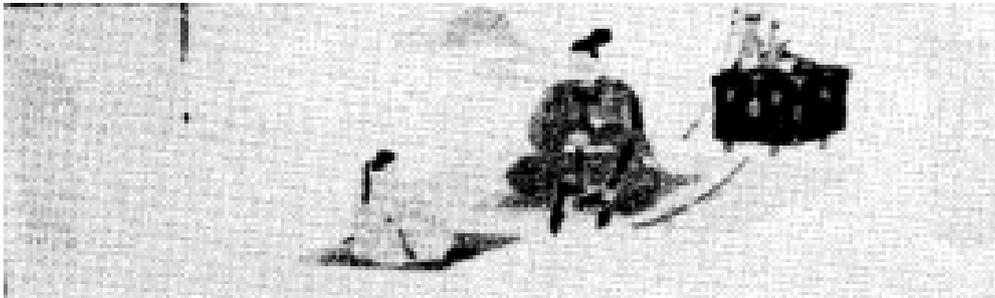
多門没後、島村亮を安田鞆彦に紹介したのは鞆彦の弟子の新井勝利であろうと考えられます。新井は、島村だけでなく、同じく山内門下の岩橋英遠も紹介しています。山内が亡くなったのは昭和6年、島村が鞆彦門下に入門したのはその数年後ですが、その頃の鞆彦は、昭和15～6年に代表作「黄瀬川の陣」を発表できるほどに健康も回復し、生涯で一番の活躍期でした。よって、入門を希望する人も多かったようですが、古い門下生の中に了見の狭い人がいて、新門下生の増えるのを嫌っていたという話もあります。鞆彦自身は優れたところのある人はだれでも好きという性格の人でした。



火曜会にて（昭和33年、後ろから2列目、左から2人目が島村亮）

岩橋英遠は入門後、鞆彦門下としてあまり活躍せず、戦後改めて入門したという経過を持っています。島村亮も入門はしましたが、院展には出品せずに、作風も鞆彦とは大変ことなっています。その間、島村は官展には出品し続け、入選しています。鞆彦は門下生がどこに出品しようと自由にしていました。また、島村亮は昭和16年に横浜捜真女学校に勤務していますが、これも新井勝利が捜真の図画教師をしていた関係からではないかと考えられます。なにしろ恰幅の立派な人だったようですが、昭和30年代はじめに亡くなり、もと同門の岩橋英遠が文化勲章を受章したほど活躍したのに比べて、本当に残念だったといえましょう。

また、島村が模写したと考えられる安田鞆彦の「楠公父子」は「武者絵の鞆彦」といわれるほどで、当時人気のあった鞆彦の「楠公」は多くみられるようですが、鞆彦は「父子対面図」は描いていないようです。



楠公父子

23冊のスケッチ帖から

大野 一郎

はじめに

島村画伯は大正8年から亡くなる2年前の昭和31年までの間に描いた23冊のスケッチ帖を遺しました。ここには、作品の下絵となったスケッチはもちろん、写生会のメモなど、さまざまな覚え書きなどの書き付けが記されていました。スケッチ帖に遺されたこれらの文字には、画伯の人柄だけでなく、絵画観ともいべきものも書き留められています。

スケッチ帖は、画伯が自身のスタンスを決定するような大事な時期のものが欠けていますが、ここでは年代順にスケッチを追うとともに、できる限り書き付けの内容も紹介します。また、島村画伯が師事した大家の動向、美術団体の流れなどの関係事項も視野に入れながら、画家「島村亮」の歩みをたどることにします。

「大正8～11年スケッチ帖」(17cm×23cm)

山内多門へ入門 修行時代 山内多門に師事した当初のスケッチです。「表神保町 文房堂」のスケッチ帖に「9.5.1919」と日付が入っています。

大正8年11月17日「立川ニテ、雨中写生」には水彩で彩色が施されています。11月18日「青梅にて」、11月19日「御獄山腹」といった武州御獄山へ写生旅行など、多摩地方での一連のスケッチです。

大正11年7月21日、鬼百合の彩色畫、死んだ小鳥なども描いています。

また、高瀬氏が「扉のウラに大正時代の流行歌がいくつか書き留めてある。こうした流行歌が好きであったのだろう」と記したものは「酒場の唄」「恋の鳥 カルメンのうた小曲」に加えて、次の煙草の唄が記されていました。ただし、当時の亮が煙草を嗜んでいたのかどうかは分かりませんが少し厭世的な内容です。

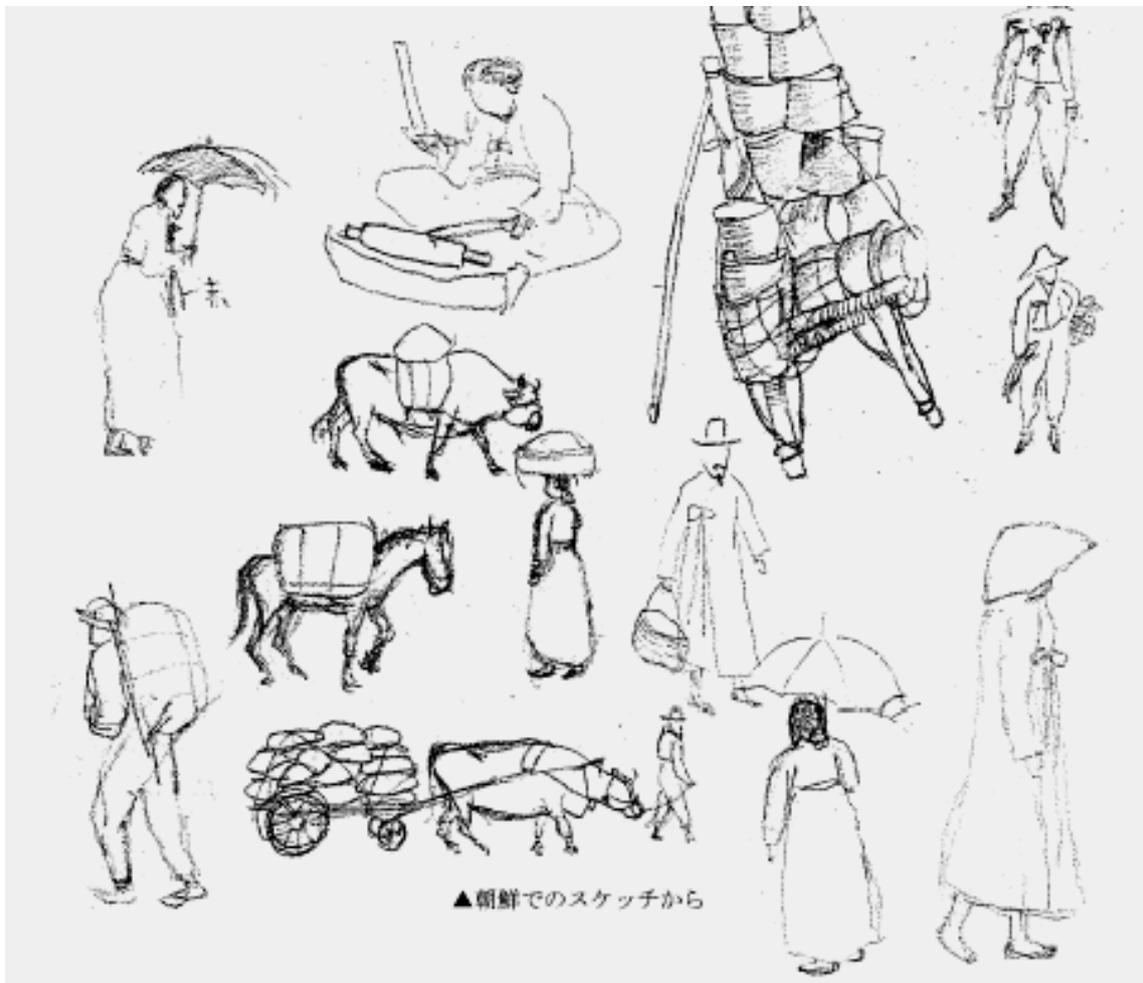
「煙草のめめ空まで煙せ どうせこの世が癩のたね

“煙よ煙 ただ煙り 一切合切 みな煙”

煙草のめめ照る日も曇れ どうせ一度は涙雨
煙草のめめ忘れて暮らせ どうせ昔はかへりやせぬ
煙草のめめあの世も煙れ どうせ亡くなりや野の煙
煙草よいよ横目で見たら 好きなお方もまた煙草
煙草つけよか紅つけませうか 紅ぢゃあるまい脂である
煙草ぶかぶかキッスしてみたら 鼻のパイプに火をつけた」

「大正9～11年スケッチ帖」(14.5cm×18.5cm)

師匠の山内多門のお伴として同行した朝鮮旅行におけるスケッチと思われます。朝鮮の風景、農家、炊事をする婦人、農作業中の人々のスケッチが多数描かれました。



大正9年5月29日「朝鮮飲食店 源興館内」「肉テンプラ ハポセ」

5月30日「水原」

5月31日「往十里付近」

6月3日「洗剣亭」

6月7日「釈王寺ニテ」

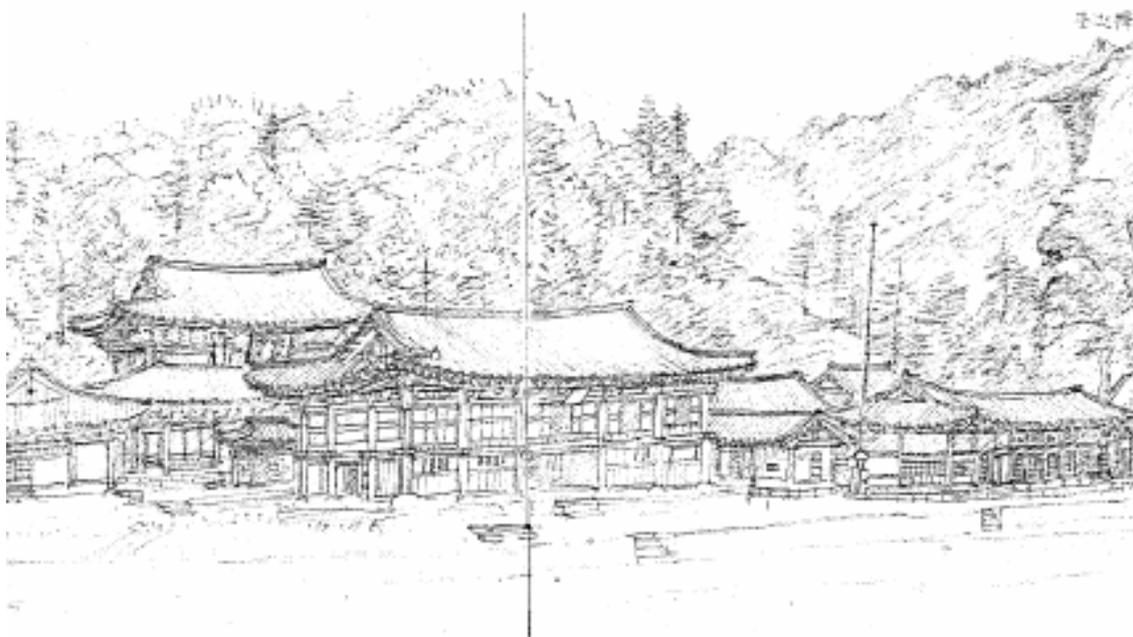
また、作画年は不詳ですが帰国後と思われる静物の着色画が一枚あります。

大正11年11月28日「すすき」、他にも稲穂、脱穀する人、和服の婦人、そして「飛びかけて照る日」とある人物画がかかれています。

表紙裏には、友人知人の住所氏名を録しています。その中には「小島仁之助」「井上篤太郎」「霜島幸次郎」「関野聖雲」といった在京の郷土の著名人の名がみられます。また、台湾、大連の知り合いの名前も記されています。

「大正9年スケッチ帖」(23cm×29cm)

大正9年の朝鮮旅行におけるスケッチ帖の2冊目。こちらは、6月8日から28日までのもので、すべてが金剛山など山を中心とする風景画となっています。スケッチに遺された多数の鉛筆画による朝鮮の風景は以下の場所のものです。



長安寺(6月25日)

6月8日「金剛山鷹山」「金剛山五峯山」「彩霞峯」「外金剛八潭ノ上ニテ」

6月9日「外金剛八潭ノ上ニテ」

6月10日「金剛山入口養珍里付近」「外金剛八潭ノ上ニテ」

6月16日「外金剛山禅溪寺」「外金剛集仙峯極楽峡ヨリ」

6月17日「外金剛飛鳳瀑」「外金剛玉流瀑玉流潭」「外金剛八潭上り口ニテ湫潭橋」「九龍瀑」

6月18日「寒霞溪」「寒霞溪ニテ水晶峯ヲ望ム」

6月19日「旧萬物相三仙岩」「寒霞溪」

6月20日「一週岩付近」「奥萬物相」「新萬物相」「萬物相玉女峯」
6月21日「新豊里ニテ温井嶺ヲ望ム」
6月22日「新豊里」「外金剛神仙台」
6月23日「九成洞」「九一潭」「内金剛九成洞九岐淵」
6月25日「長安寺」「元成洞」「内金剛元成洞九岐淵」
6月26日「靈源庵 金剛山 遮日山 白馬峯 觀音峯」「内金剛明鏡台」「黄流潭」「独聖閣山 王閣」
6月27日「百塔洞」「内金剛百塔洞多宝塔」「望軍台ニテ」「百塔洞証明橋」
6月28日「内金剛鳴淵潭」「安養庵」「長安寺」

「大正9年～昭和3年スケッチ帖」(16cm×23cm)

大正のものには、風景のスケッチが多く、また書き込みが多くみられます。例えば、小鳥のスケッチに添えられたもので、「個性は決して他力無しに表現されるものではない。力強い伝統こそ力強い個性の母である。個性は先天的な趣味性の謂であって、ドグマや理論ではない(石野隆)」といった書物などからの抜書きです。それ以降、早春の三溪園、大正14年の婦人スケッチ、田植えなどの田園風景、人物が描かれていますが、総じて書き込みが多くみられます。以下は、裏表紙の書き込みで「梁楷牧溪」に言及したものです。これは、師匠の言葉か、亮自身の感想か、あるいは本からの抜書きなのかは不明ですが、少なくとも亮は共鳴して書き残したのだと思われます。

「見れば只 何の苦もなき水禽の
脚にひまなき我が思ひかな
君を置いて仇し心を我持たば
末の松山浪も越えなん

狂人は寒熱を知らず 寒熱を知らざるが故に苦痛を感じず。されど苦痛を感じざるが故に安楽なりと言うこと能はず。

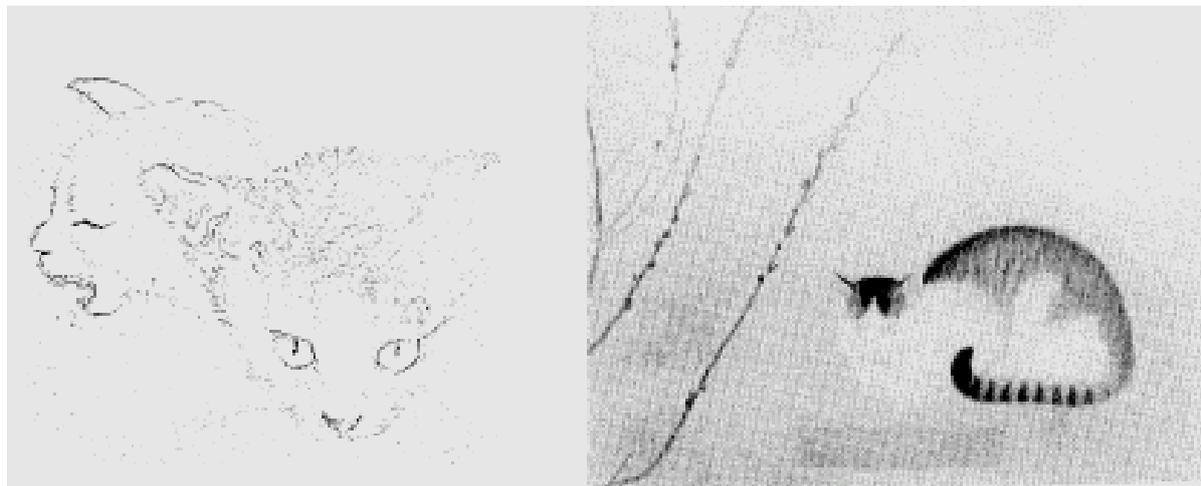
絵の第一義は単墨にあるなど思ったら大間違いである。梁楷牧溪がえらいのはその眼が宇宙の隱微を洞察してゐるからで、筆は寧ろ後からついて来たのである。従って『六祖』や『猿鶴』をみて、どうもこの筆がたまらないなど觀賞するのはえらい邪見で、まづそこに人間が或いは猿が生きてゐるといふ事実がまざまざと指摘され、或いは大地が寂寞として久遠に横たわつてゐるといふ事実がはっきりと觀者の頭に入って来る。それを味わふべきである。」

ここにでてくる「梁楷牧溪」とは、中国南宋時代の人で宮廷画院の画家であった巨匠。日本でも水墨画の師匠格で、耕織図の作者としても著名です。

「昭和4年スケッチ帖」(13.5cm×18cm)

5月24日に猫のスケッチが数点、4月には犬の絵が描かれています。第9回若葉会展には、猫と柳の芽を描いた「猫」を出品しています。このようなスケッチを活かしたのでしょうか。

また、5月22日には三田で馬耕犁による田起こしのスケッチを遺し、同じ5月には、宮ヶ瀬で法輪堂、山籠などをスケッチしています。



猫のスケッチ

「猫」

「昭和5年スケッチ帖」(14cm×21cm)

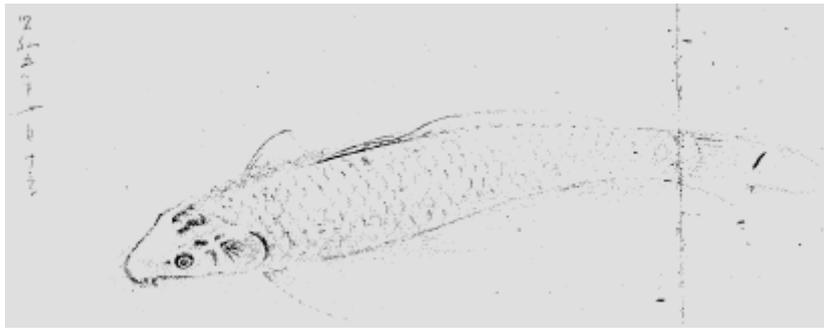
春陽会洋画研究所 模索期 このスケッチ帖では、10月の三越新館、演芸場、武蔵野館、鯉、11月には永代橋、白木屋など都市風景のスケッチが多くみられます。

また、草野球のスケッチ、金丸氏のアンパイア、淑子さん、田鶴子様などには、これまでのスケッチとの相違が感じられます。これは、昭和7年に春陽会洋画研究所において洋画技法などの指導を受けることとなる亮の絵画志向のあらわれかとも思われます。

このように、亮は洋画にも興味を持ち、代表作の「春甫」に点描を取り入れたりしています。晩年、絵画の技法について次のように語っています。

「最近の日本画は、日本画だか、油絵(洋画)だかわからないという人がいます。その通りであります。今や美術界も国際的になって技法の上にとや角いう必要はないと思うのであります。ただ、材料の上で日本画と区別がつくのでありまして、描法はどう表現しようとするか自由であります。それが抽象的であろうと具象的であろうと、かまわないのであります」(1)。

また、この年は「春越」で日本畫会展に入選(佳作)しています。



鯉のスケッチ



親子のスケッチ

「昭和5～9年スケッチ帖」(20cm×15cm)

昭和9年6月の千頭 善高島上人墓前ニテ、木と猫、松林(彩色)の他に、黒色コンテによる漫画のような人物スケッチがありますが、亮のサインの他に「清水一郎君」「天地一寸」「トル」などの原稿指定が入っていますので、雑誌などの挿し絵に使用されたものかもしれません。

第11回若葉会展には「冬景」を、第12回若葉会展には「林の中」を出品しています。



人物スケッチ

「昭和6年スケッチ帖」(18cm×27.5cm)

昭和6年3月の花、2月の立ち雛の他、日付けのない裸婦や鮎のスケッチが多数描かれている。裸婦は一部鉛筆ではなく黒色のコンテを使用しています。

昭和6年度日本画会展には、「春趣」を出品しています。

「昭和6年スケッチ帖」(18cm×27.5cm)

昭和6年8月、熱海でのスケッチが多く、お宮の松、金色夜叉記念碑などを写生しています。

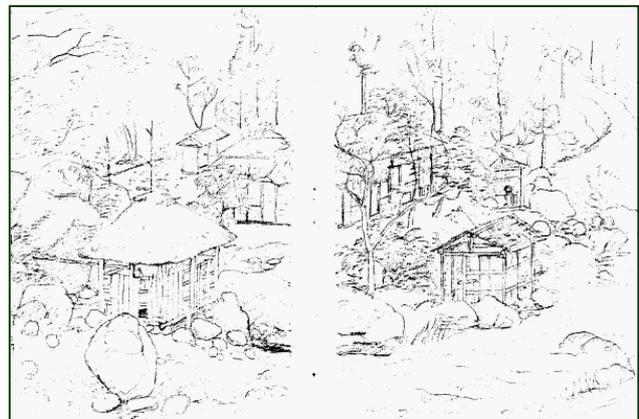
7月28日の小涌園助涛庵でのスケッチ、同所と思われる彩色の風景画を描いています。その後、10月18日には裸婦スケッチ、そして黒色コンテを使った人物画を多数遺しています。

また、翌7年1月9日、竹や木々、花の彩色画などを描いています。

表紙裏のメモがきには、10月25日の近郊写生会の覚えが記してあります。場所は永福寺隣の中川一政邸で、午前10時に集会、雨天中止とあります。当時、春陽会洋画研究所で学んでいた亮ですが、指導を受けていた木村莊八が岸田劉生、中川一政らとともに草土社を結成していますので、その関係から写生会に参加したのでしょうか。

「昭和7年スケッチ帖」(24.5cm×18.5cm)

「春甫」帝展入選 充実期 昭和6年には、師事していた山内多門が死去します。その後、亮は安田靉彦の門に入ることとなります。また同年、「冬日」「春日」で日本画会展に入選します。亮にとっては、いろいろなことが起こった年だったといえます。



宝川温泉でのスケッチ

ここでは7月8日、山の風景、宝川温泉の入浴図、ともに水彩による彩色。同月26日、伊香保七重ノ滝茶亭、27日榛名神社でのスケッチが多数描かれています。

写生について、亮の師匠となった安田鞞彦は、次のように述べています。

「写生は制作の基本です。若い頃は毛筆と矢立てを持って和紙に描きましたが、毛筆だと早描になるし、どうも味が出るので早くから鉛筆にしました。細かいところを掴むのには筆だけではいけません。そして急所と思うところだけは、かなり克明に描きます」(2)。

この後、昭和8年「暖日」で日本畫会展に、昭和11年「春甫」が帝国美術院展にそれぞれ入選するなど、亮にとって充実した年が続きます。

「昭和11～12年スケッチ帖」(22cm×23cm)

「秋林」で文部省美術展覧会に入選した昭和11年ですが、この年の日本画会展には、「春野」を出品しています。

この年のスケッチとしては、10月の花、そして翌12年8月の蝶や虫などがあり、それぞれに水彩による彩色が施されています。また、鉛筆による鳥、6月27日の苗籠、苗束、そして蓑や菅笠など田植え時の田圃でのスケッチが遺されています。

表紙裏のメモがきには、「アブストラクション(抽象物)、オブジェ 見てゐるものを表わす、コラージュ、シュールレアリズム、アバンギャルド、ゲテモノ民藝」の文字がみられ、昭和12年当時の亮の関心領域がうかがわれます。

ここでいう「ゲテモノ民藝」とは、柳宗悦らが提唱した民藝運動のことだと思われます。これは、日常的な道具類に美を見出すというものです。この運動によって、朝鮮、沖縄などの陶磁器の美が発見され、評価を得るようになりました。



熱海でのスケッチ

「昭和12～14年スケッチ帖」(30cm×23cm)

のどかな春の農村を点描という手法で描いた「春甫」と同様のアプローチによる「春閑」で、第1回文部省美術展覧会に入選したのが、昭和12年です。

同年のスケッチには、3月の吉野村風景、和服姿の子供たち、わさび田のある風景、土筆を描き、4月には羽村、奥多摩など精力的にスケッチ旅行をしています。その後は、7月の枇杷、9月の苺など彩色の静物画が多く描かれています。

また、13年1月には南毛利村をスケッチ、その他牛、馬、蜻蛉と草、花などが描かれています。その中で、10月19日の永福寺付近と記された草木のスケッチは、その場所からすると中川邸での写生会のものかも知れません。翌14年の初頭には、椎茸を、2月には稲の切り株と残雪の田圃、りすなどのスケッチがあります。春になると、鳥やつつじなどをスケッチしています。



スケッチ(昭和13年10月20日、彩色)

「昭和13年スケッチ帖」(26cm×18.5cm)

昭和13年は、「浅春」で第2回文部省美術展覧会に入選しています。

この年の4月末に、亮は再び朝鮮を訪れます。あくまで山内多門のお伴だった前回の写生旅行とは違い、4月29日に京城(今のソウル)に入った後、5月2日に奉天、3日には大連へ満州鉄道で大陸まで足を伸ばすなど、自由に過ごせたものと思われます。16日の新京、18日の南嶺、永記花店などを描いた後、この旅行は6月10日の済州島のスケッチで終わってい

ます。一月以上にわたる長い旅だったようです。

今回の旅でも、川辺で炊事をしたり、井戸端会議に興じる女性、ゴロンと横になるチマチョゴリの女性など、朝鮮の人々のいきいきとしたスケッチを多数描いています。

また、今回は中国服の男女、豚を追う農夫、荷車の車夫など中国の人々や風景も描かれています。

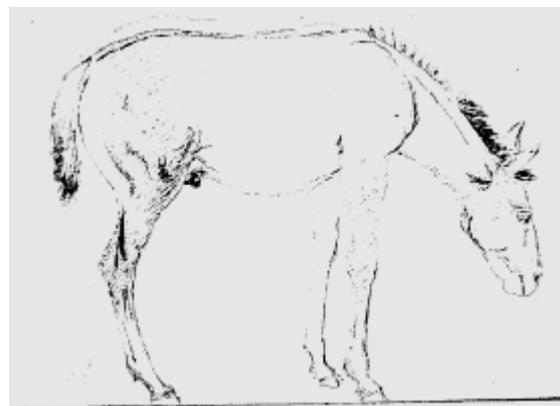


チマチョゴリの女性（上） 中国服の母子（右）

「昭和14年スケッチ帖」（30.5cm×22cm）

昭和14年5月、松島への旅で松島、五大堂を描き、続いて平泉、秋保温泉を訪れ磊々峡などの風景画を遺します。また鳴子温泉では風景画だけでなく、一ノ関では農作業をする人々、乳を飲む子馬など馬のスケッチを多数描いています。

翌年、昭和15年には「春郊」が紀元二千六百年奉祝展覧会に入選することとなります。



馬のスケッチ（昭和14年6月4日、一関）

「昭和17年スケッチ帖」（21cm×15cm）

スケッチの残っていない昭和16年には、横浜捜真女学校に勤務しました。この仕事は、安田靉彦の門下で、現在も活躍中の著名な日本画家・小倉遊亀の後任ということです。もっとも遠くて通勤が大変だったこともあって1年で辞退しています。絵を描く時間があまりとれ

なかったのもその一因だったのかもしれませんが。

「里の春」によって、第5回文部省美術展覧会に入選したのが昭和17年のことでした。

この年のスケッチは、力士、立ち雛、雀、鯉が描かれた後、2月には三島からの富士山を車中から、5月には水彩によって彩色を施した蓊を描いています。

6月には、仏法僧を聞きに芦ノ湖を訪れ、風景画、植物、貝、漁をする人々のスケッチを遺しています。7月、善光寺、上田城など信州へスケッチ旅行に行き、風景、魚の開きなどの絵を描きました。

11月、品川沖、大森にてカワハギ、ヤガラなどの魚をスケッチしています。

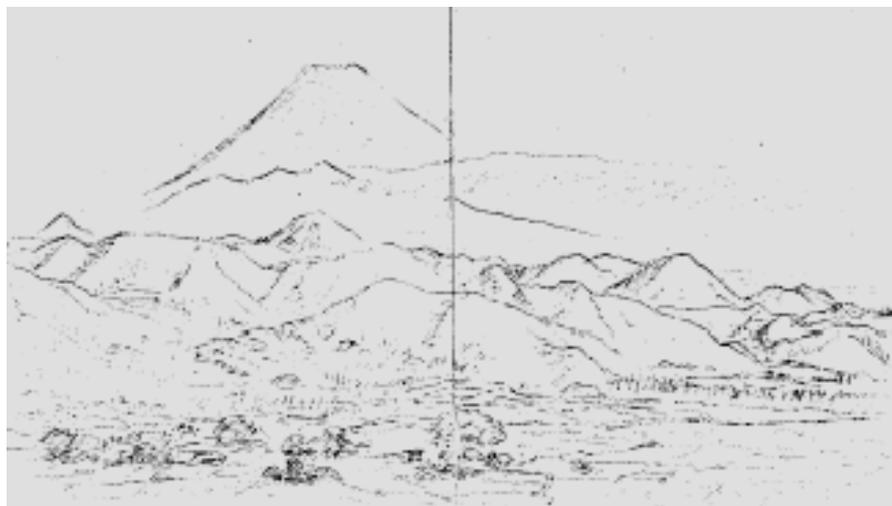
「昭和18年スケッチ帖」(17cm×25cm)

昭和18年6月、千葉県小湊の漁村風景、船を漕ぐ人、海老や魚などの写生を行っています。いずれも彩色はありません。

その後、田植えのスケッチ1点があり、6月の枇杷、7月の茄とその花、また妙義山では神社、山の風景を多数描き、信州上田では田転がしによる除草作業を、千曲川では釣り人を描きました。

「昭和18年スケッチ帖」(17cm×25cm)

昭和18年、鶏頭や秋の草に混じって、虎や兎のスケッチがある。年賀状か注文を受けたためと思われます。10月には水彩で彩色された富士山のスケッチ数葉が、牧場、湖などから描かれ、秋の山村の様子も遺されています。



雀、雪をかぶった松の枝を描いた後、明けて19年1月には飯山、古沢、国分の風景、牛や麦踏みをする人々のスケッチがあります。

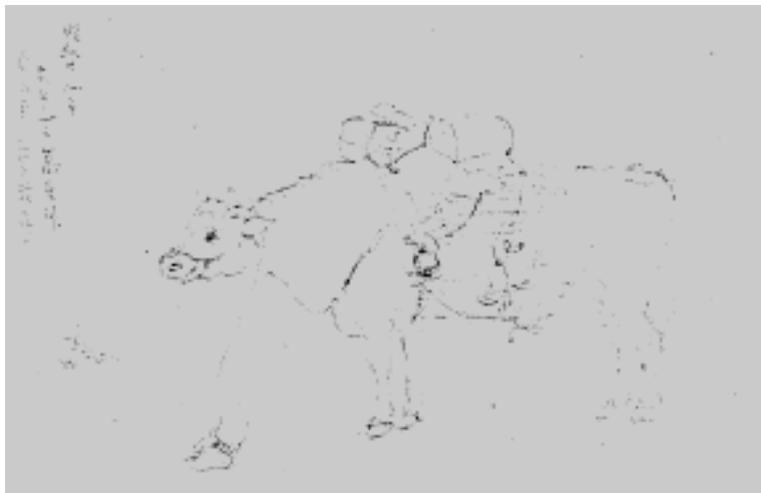
裏表紙には、戦時中という世相をあらわす石鹼配給の注文、購入期間などがメモされ、また肖像画の注文の寸法などの覚え書きが記されています。



富士山のスケッチ（昭和18年10月12日）

「昭和18年スケッチ帖」（20.5cm×14.5cm）

昭和18年5月の万座峠、万座峡、山田温泉への旅でのスケッチが多数描かれている。信州五色温泉雷滝、白根山登山道、噴火口、温泉湧出口、湯治場・日進館などが描かれます。一部、水彩による彩色画されています。特に、万座峠の峠越えのための荷牛を詳細に描いた絵は、風俗を知る上でも参考となりましょう。



万座峠でのスケッチ（昭和18年6月1日）

「昭和26年スケッチ帖」（11cm×15cm）

日本美術展覧会委員就任 晩年 戦争が終わった昭和21年、亮は南畫院同人となりました。また、神奈川県立厚木高等女学校に勤務することとなります。翌22年、文部省主催日本美術展覧会委員に、23年には全日本南画連盟創立委員となり多忙な日々を送ることとなりま

す。この間のスケッチは遺されていませんが、公人としての職務が多くなったためかもしれません。

この年のスケッチ帖には、昭和26年6月5日の茨城方面への旅のものです。牛久沼、小川芋銭邸下、船中から牛堀付近、わかさぎ、潮来十二橋の彩色スケッチ数葉、新左衛門川、付近の農村風景のスケッチ多数。籠に入った鶏、農作業をする人々、川漁の様子、高瀬舟、エビウケ、鯉ウケ、ツウケ（四つ手網）、霞ヶ浦、利根川などを描いています。これらは、風景画としてだけでなく、当時の農村風景を知る上でも貴重なものといえます。



牛久沼 於小川芋銭邸下（昭和26年6月8日）

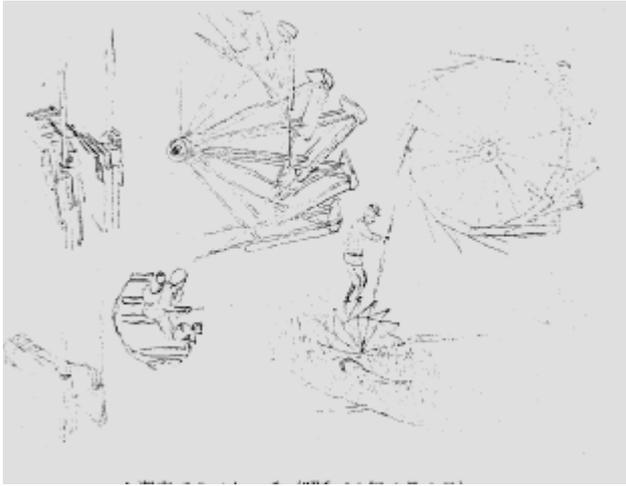


潮来十二橋（昭和26年6月7日）

「昭和26年スケッチ帖」(21cm×29cm)

同じ茨城への旅のスケッチ。こちらには、潮来十二橋の彩色スケッチ数葉、潮来で働く人々のスケッチ多数。鹿島、潮来、鹿島神宮、霞ヶ浦、水郷牛堀などを描いていますが、特に竜骨車の詳細なスケッチ、それを動かして田に水を引く農家の人のスケッチは当時の農村の様子を知る上でも貴重なものです。





潮来でのスケッチ（昭和26年6月5日）



水郷十二橋（昭和26年6月5日）

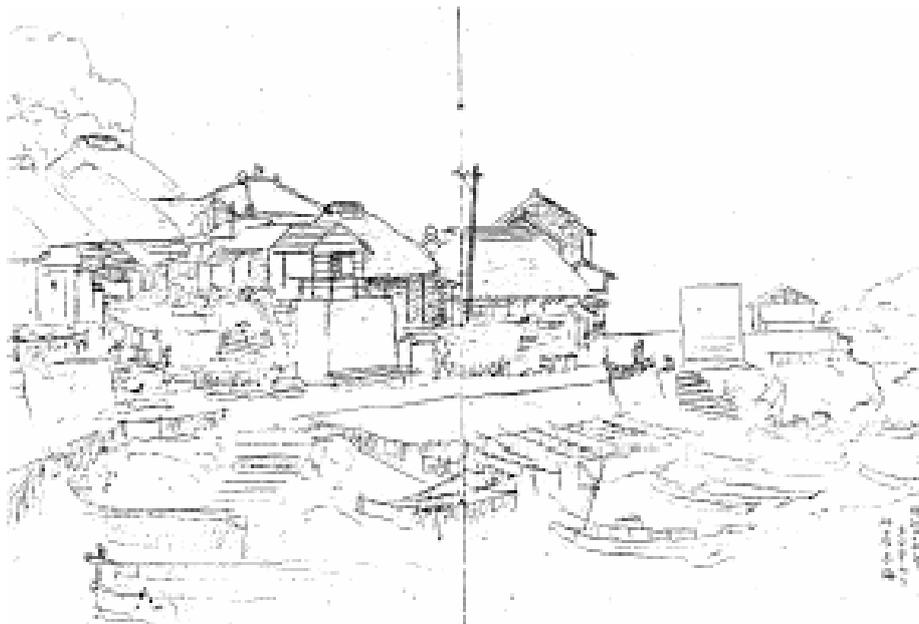
「昭和27～31年スケッチ帖」（29cm×21cm）

福井百合子と結婚したのが昭和29年、その翌年には長女、次女が誕生するなど私生活でいろいろなことがあった年です。

昭和27年5月には、外房白浜、湯西川温泉で風景画のスケッチ、一部色鉛筆で彩色を施す。

昭和31年5月川俣温泉瀬戸合峡、川俣林道などをスケッチ、こちらの彩色も色鉛筆によるもの。

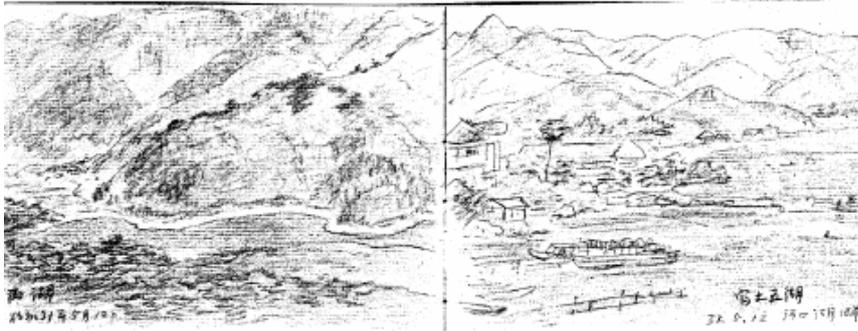
昭和33年3月20日に亡くなった亮の遺されたスケッチとしては最後となるのが31年7月23日の百合の図、27日の裸婦ですが、ここにも色鉛筆による彩色がみられます。裸婦のスケッチには「於平塚ろう学校」と記されています。



外房太海（昭和27年5月29日）

「昭和31年スケッチ帖」(11.5cm×15.5cm)

昭和31年5月1～3日、川俣温泉瀬戸合峡でのスケッチの2冊め。小振りのスケッチブックには、薬師堂や川、龍王峡豎琴の滝などを描いています。また、その10日後の5月12日には、西湖、河口湖などの富士五湖、白糸の滝をスケッチしています。



富士五湖(昭和27年5月12日)



(右)音止の滝(昭和31年5月12日)

「年代不詳スケッチ帖」(28cm×20cm)

日付けのない裸婦のスケッチが多数描かれています。裸婦はおかっぱ頭の少女で、一部が鉛筆による他、多くは黒色のコンテが使用されています。

亮は、昭和6年から春陽会洋画研究所において洋画技法、西洋美術史、芸用解剖学等の指導を受けていますので、この頃の習作かもしれません。



裸婦(年代不詳)

おわりに

島村亮という一人の画家の足跡を、遺されたスケッチから追ってきました。

亮自身は、美術団体について直接的な発言をしていませんが、師匠につく、作品を出品する、委員などの役に就くなど、その行動から画壇のある一面ですがほのみえてきます。

その盛衰を追うことで、日本近代美術史が語れるとまでいわれるのが日本の美術団体です。美術家団体でも組合でもない日本の美術団体は、さまざまな要素が複雑に絡みあったあいまいなものとして存在しているといわれています。また、それは日本美術院設立、そして文部省美術展覧会開設以降、つねに守旧派對革新派、という二項対立図式で美術史などの概説書に描かれてきました(3)。

“官对在野”構図の無意味が説かれ、再興日本美術院でさえ「第二官展」たることを求めたのではない(4)といわれている現在では、所属の美術団体を追うことはあまり意味のある作業とはいえないかも知れません。「図式的な美術団体興亡史やそこから派生する作家列伝を旨とした人脈史、それに楽観的な発展史観にもとづくイズムの交代史」だけでは、日本近代美術史は語るができないとされるようになりました。このように、否定された図式的な捉え方ですが、一方では「院展100年」にあたる今年、記念の展示会が各地でいくつも盛大に催されましたが、このこともまた現実のことなのです。

亮が師事した二人の師匠、特に安田靉彦は門下生がどこの展覧会に出品しようと構わないという立場をとっていたためか、美術団体に振り回されることなく作品を文展などの官展へ出品し続けます。ここにも関連団体を追うことの無意味さがみえるようです。しかし、晩年には文部省主催日本美術展覧会委員になるなど、文展に固執した理由が何か他にあったのかもしれない。

ともあれ、晩年の亮は日本画について、次のような力強いステイトメントを発しています。「...日本画は何処へゆくのかを案ずる人がありますが、明治時代に若い人達によって洋画の技法を取り入れた表現をしたのに対し、当時は朦朧派と呼ばれ前途をあやぶまれた絵が今や古典的になろうとしているのであります。...(中略)...伝統ある日本画は、日本人独特のすぐれた芸術的感覚によって日本国が亡びない限り全世界の特異な存在として永久に生かされてゆくのではないのでしょうか」(5)。

【註】

- (1) 島村亮「日本画は生きている」『睦月』（昭和15年）
- (2) 塚越正明「靉彦画の原点に触れる」『Museum News 44』（平成10年、川崎市市民ミュージアム）
- (3) 「特集 ザ・美術団体」『月刊美術255』（平成8年、実業之日本社）
- (4) 大熊敏之「日本的ムラ社会の成立 美術団体の草創期」『月刊美術255』（平成8年、実業之日本社）
- (5) 島村亮「日本画は生きている」『睦月』（昭和15年）

島村亮 年譜

西暦 / 年号 / 年齢 /	事	項
1901 明治34	妻田村456	島村浪吉長男として生まれる
1916 大正5 16	厚木町立厚木尋常高等小学校卒業	
1918 大正7 18	育英実業学校へ入学（東京渋谷）	
1919 大正8 19	山内多門畫塾へ入門（実業学校は中途退学）	
1920 大正9 20	朝鮮へ写生旅行	
1931 昭和6 31	山内多門死去	
	春陽会洋画研究所で洋画技法、西洋美術史、芸用解剖学等の指導を受ける。「春越」日本畫会展に入選（佳作）	
1932 昭和7 32	「冬日」「春日」日本畫会展に入選	
1933 昭和8 33	「暖日」日本畫会展に入選	
1934 昭和9 34	安田靫彦の門に入る	
1935 昭和10 35	「春甫」帝国美術院展に入選	
1936 昭和11 36	「秋林」文部省美術展覧会に入選	
1937 昭和12 37	「春閑」文部省美術展覧会に入選	
1938 昭和13 38	「浅春」文部省美術展覧会に入選	
	朝鮮、奉天、大連へ写生旅行	
1940 昭和15 40	「春郊」紀元二千六百年奉祝展覧会に入選	
1941 昭和16 41	横浜捜真女学校に勤務（小倉遊亀氏の後任）	
1942 昭和17 42	「里の春」文部省美術展覧会に入選	
1946 昭和21 46	南畫院同人となる。神奈川県立厚木高等女学校に勤務	
1947 昭和22 47	文部省 第3回日本美術展覧会委員となる	
1948 昭和23 48	全日本南画連盟創立委員となる	
1952 昭和27 46	神奈川県立伊勢原高等学校に勤務	
1953 昭和28 53	福井百合子と結婚	
1954 昭和29 54	長女、次女誕生	
1958 昭和33 58	3月20日 厚木町の自宅で死去	

*本年譜は、『島村 亮畫伯』（高瀬慎吾、私家版）に、島村家の協力などにより一部加筆して作製しました。

参 考 文 献 一 覧

著 者	/ 書 名 /	出版社、出版年
高階秀爾	『日本近代美術史論』	平成2年、講談社
辻惟雄監修	『日本美術史』	平成3年、美術出版社
瀬木慎一	『名画の値段 もう一つの日本美術史』	平成 年、新潮社
橋本 治	『ひらがな日本美術史 』	平成 年、新潮社
ルイ・パ・カド	『日本美術 集記』	平成 年、新潮社
石田尚貴監修	『日本美術史事典』	平成元年、平凡社
	『近代日本美術事典』	昭和62年、講談社
	『原色図典 日本美術史年表』	昭和平成 年、新潮社
谷 信一	『日本美術辞典』	昭和62年、東京堂出版
永尾比呂志	『日本美術史 新版 用と美の造型』	昭和57年、筑摩書房
	『資料 日本美術史』	昭和57年、松柏社
塚越正明	「靱彦画の原点に触れる」 『MuseumNews44』	平成10年、川崎市市民ミュージアム
	「特集 ザ・美術団体」 『月刊美術255』	平成8年、実業之日本社
大熊敏之	「日本的ムラ社会の成立 美術団体の草創期」 『月刊美術255』	平成8年、実業之日本社

島村亮 収蔵作品目録

【凡 例】

- 1 本目録は厚木市郷土資料館 第一回収蔵資料展「厚木の画家 島村亮」の展示目録と厚木市郷土資料館所蔵になる島村亮関連資料の目録を兼ねるものである。
- 2 法量は、原則的には縦×横で示した。単位はセンチメートルである。
- 3 会期中、展示替えを行うので、目録に記載されていても会場に展示されていない場合がある。

【収蔵作品目録】

	題 名	種 別	法 量	備 考
1.	緋鯉と真鯉	軸	119×40	絹本
2.	松上の鷹	軸	133×46	紙本、「一路」印
3.	月に虎	軸	132×43	紙本
4.	早 春	軸	30×37	紙本
5.	真 鯉	軸	47×54	紙本
6.	孔子像	軸	29×40	紙本
7.	竹林の賢人	軸	30×38	紙本
8.	仙 人	軸	55×58	紙本
9.	山水四季	軸	138×45	紙本、3枚組
10.	山水四季	軸	138×45	紙本
11.	山水四季	軸	138×45	紙本
12.	レンゲ草とウズラ	四角額	44×54	紙本
13.	うぐいす	四角額	44×54	紙本
14.	リンゴとぶどう	四角額	44×54	紙本
15.	竹に雀	四角額	48×54	紙本
16.	牛と少年	四角額	49×54	紙本
17.	洒水の滝	四角額	49×54	紙本
18.	真 鯉	四角額	48×54	紙本
19.	深 山	四角額	49×54	紙本、水墨画
20.	楠公父子	横額	32×102	安田鞞彦模写カ

21.	山家と洗濯女	縦額	134×54	山内多門模写
22.	雨と釣人	縦額	141×55	山内多門模写
23.	急流と人と牛	縦額	143×54	山内多門模写
24.	狂女の図	縦額	131×64	橋本雅邦模写
25.	早 春	大額	153×188	
26.	春 野	大額	175×210	
27.	春 甫	大額	153×188	帝国美術院展入選
28.	秋 林	大額	148×176	文部省美術展入選
29.	雨降晴雪	小紙	26×36	厚木六勝模写
30.	仮屋喚渡	小紙	26×36	厚木六勝模写
31.	相河清流	小紙	26×36	厚木六勝模写
32.	桐堤賞月	小紙	26×36	厚木六勝模写
33.	熊林暁鴉	小紙	26×36	厚木六勝模写
34.	菅廟驟雨	小紙	26×36	厚木六勝模写
35.	厚木上橋	小紙	22×33	スケッチ
36.	相模川畔	小紙	22×29	スケッチ
37.	牛のいる風景	裏打絵	146×55	山内多門模写
38.	雪景山水	裏打絵	105×67	橋本雅邦模写
39.	呂洞竇雲坊之図	裏打絵	77×50	橋本雅邦模写
40.	竹に鶏	裏打絵	109×52	紙本
41.	スイトピー	裏打絵	52×47	紙本
42.	水 仙	裏打絵	49×57	紙本
43.	写生雌鴨	裏打絵	28×79	紙本
44.	鍾馗像	裏打絵	79×40	紙本
45.	風 神	裏打絵	28×31	紙本
46.	雷 神	裏打絵	28×31	紙本
47.	羅 漢	裏打絵	37×18	紙本
48.	面壁ダルマ	裏打絵	37×18	紙本
49.	尊者大加葉	裏打絵	35×16	紙本
50.	菩 薩	裏打絵	37×25	紙本
51.	唐人スケッチ	裏打絵	40×28	紙本
52.	枇 杷	裏打絵	38×45	絹本
53.	牡 丹	色紙	27×24	
54.	山桜と鳥	色紙	27×24	
55.	ワラボッチの風景	色紙	27×24	

56.	ボケと小鳥	色紙	27×24	
57.	エ ビ	色紙	27×24	
58.	紅 梅	色紙	27×24	
59.	真 鯉	色紙	27×24	
60.	深 山	色紙	27×24	
61.	柳と鳥	色紙	27×24	
62.	朝 顔	色紙	27×24	
63.	シイタケ	色紙	27×24	
64.	オシドリ	スケッチ	21×31	図画用紙
65.	フクロウ	スケッチ	21×31	図画用紙
66.	震生湖畔	スケッチ	21×31	図画用紙
67.	成田不動尊	スケッチ	21×31	図画用紙
68.	長谷人形頭 松王	スケッチ	21×31	図画用紙
69.	長谷人形頭	スケッチ	21×31	図画用紙
70.	当麻の道	スケッチ	21×31	図画用紙
71.	魚二匹	スケッチ	21×31	図画用紙
72.	野鳥 コマドリ	スケッチ	21×31	図画用紙
73.	金 魚	スケッチ	21×31	図画用紙
74.	うちわと新聞	その他	19×29	図画成績
75.	扇面画	その他	19×29	
76.	団扇絵	その他	19×29	
77.	表 紙	その他	19×29	図画成績
78.	地 図	その他	19×29	図画成績
79.	朝 顔	その他	19×29	図画成績
80.	騎馬武者	その他	19×29	図画成績
81.	ひまわり	その他	19×29	図画成績
82.	蝶二匹	その他	19×29	図画成績
83.	傘	その他	19×29	図画成績
85.	画 帳	スケッチ	28×20	年代不詳
86.	画 帳	スケッチ	17×23	大正8～11年
87.	画 帳	スケッチ	14.5×18.5	大正9～11年
88.	画 帳	スケッチ	23×29	大正9年
89.	画 帳	スケッチ	16×23	昭和3年
90.	画 帳	スケッチ	18×27.5	昭和4年
91.	画 帳	スケッチ	13.5×18	昭和4年

92.	画 帳	スケッチ	14×21	昭和5年
93.	画 帳	スケッチ	20×15	昭和5～9年
94.	画 帳	スケッチ	18×27.5	昭和6年
95.	画 帳	スケッチ	24.5×18.5	昭和7年
96.	画 帳	スケッチ	22×23	昭和11～12年
97.	画 帳	スケッチ	30×23	昭和12～13年
98.	画 帳	スケッチ	26×18.5	昭和13年
99.	画 帳	スケッチ	30.5×22	昭和14年
100.	画 帳	スケッチ	21×15	昭和17年
101.	画 帳	スケッチ	17×25	昭和18年
102.	画 帳	スケッチ	17×25	昭和18年
103.	画 帳	スケッチ	20.5×14.5	昭和18年
104.	画 帳	スケッチ	11×15	昭和26年
105.	画 帳	スケッチ	21×29	昭和26年
106.	画 帳	スケッチ	29×21	昭和27～31年
107.	画 帳	スケッチ	11.5×15.5	昭和31年

【関連収蔵資料目録】

	題 名	種 別	法 量	備 考
1.	早春の丘	作品写真	90×14	第1回日本画院展
2.	春 趣	作品写真	90×14	昭和6年日本画院展
3.	冬日、春日	作品写真	90×14	昭和7年日本画院展
4.	暖 日	作品写真	90×14	昭和8年日本画院展
5.	春 甫	作品写真	90×14	第1回帝国美術院展
6.	春 閑	作品写真	90×14	第1回文部省美術展
7.	浅 春	作品写真	90×14	第2回文部省美術展
8.	里の春	作品写真	90×14	第5回文部省美術展
9.	秋 林	作品写真	90×14	昭和11年文部省美術展
10.	春 野	作品写真	90×14	昭和11年日本画会展
11.	春 郊	作品写真	90×14	紀元2600年奉祝美術展
12.	猫	作品写真	90×14	第9回若葉会展
13.	寒 雀	作品写真	90×14	第10回若葉会展
14.	寒日静閑	作品写真	90×14	第10回若葉会展

15.	冬 景	作品写真	90 × 14	第11回若葉会展
16.	林の中	作品写真	90 × 14	第12回若葉会展
17.	中津溪谷	作品写真	90 × 14	関東私鉄沿線南画会展
18.	強 羅	作品写真	90 × 14	関東私鉄沿線南画会展
19.	杉並木から見た芦ノ湖	作品写真	90 × 14	関東私鉄沿線南画会展
20.	成田山	作品写真	90 × 14	関東私鉄沿線南画会展
21.	里の径	作品写真	90 × 14	第4回横浜美術商展
22.	春 閑	作品写真	90 × 14	
23.	『睦 月』		37 × 25	昭和15年8月号
24.	『北相文化』	その他	19 × 29	表紙
25.	『趣味の鶴巻』	その他	19 × 29	表紙
26.	島村亮の逝去を報じた新聞			東京、神奈川、毎日
27.	『島村亮画伯』		37 × 25	高瀬慎吾著、私家版
28.	『厚木近代史話』		37 × 25	昭和45年2月刊
29.	島村亮画帖に挟まっていたもの			雑誌
30.	『第1回文部省美術展目録』		37 × 25	
31.	中国風景画 (山内多門筆)		37 × 25	亮の師匠
32.	中国風景画 (山内多門筆)		37 × 25	亮の師匠
33.	中国風景画 (山内多門筆)		37 × 25	亮の師匠

第1回收藏資料展

厚木の画家 島村 亮

発行日 平成10年12月23日
編集 厚木市郷土資料館
神奈川県厚木市寿町3-15-26
TEL 046-225-2515
発行 厚木市教育委員会
